
色づく葉。

朔芭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

色づく葉。

【Nコード】

N0506Z

【作者名】

朔芭

【あらすじ】

平穏な日々を過ごすある女性が…。

どうなるんでしょうか？

朝（前書き）

はじめて書きます。

つまらないと思います。

宜しく願います。

朝

その日は、いつもと変わらない朝だった。

いつもと同じように過ごし、終わるはずだった。

朝、携帯の目覚ましが鳴り目を覚ました。

リモコンを手にとりテレビをつけると画面には若くて可愛い女性が笑っている。

『はあっ。…顔洗お。』

顔をタオルで拭きながら、やかんを火にかけ冷蔵庫から冷凍ごはん
と卵に納豆を取り出す。

冷凍ごはんを電子レンジにかけ、納豆と卵を別々に混ぜそれを交ぜ
た。

ピーと甲高い音になる。

インスタント味噌汁にお湯をかけ箸でかき混ぜる。

ピピ、ピピ、ピピ。

ごはんが出来た。

四角いテーブルに乗せ、『いただきます。』黙々と食した。

茶碗を手早く洗い、出勤の準備を始めた。

ガスよし。電気よし。

カギよし。

『行ってきます。』

種

自宅から最寄り駅まで10分程度歩いて電車に乗りさらに10分そこから10分ちよつとで会社に着く。はずだった。

会社の最寄り駅から歩いていると、

バシヤツ。

なに？

頭、冷たい！

でも雨じゃない。

まわりと見渡すとすぐ後ろにサラリーマンらしき男性がいた。目が合うと紺色のスーツに同じ色が使われているネクタイをした私より年上であろう彼は笑った。

ニコツと可愛らしい笑顔だったので思わずこちらも笑ってしまった。

『すみません。』とあやまった。わたしが。

『いや、ごめん。手が滑ってしまって。これ使って。』
とズボンのポケットから綺麗にアイロンのかかったハンカチを差し出してくれた。

私が濡れたのは、どうやら彼にやられたらしい。

彼は左手に紙パックの野菜ジュースを持っていた。あたしかも甘い

匂いがする。

しかもその紙パックつぶれてるじゃないか？

見ず知らずの人にハンカチ借りても返すの面倒だし。

『大丈夫です。』

と断ると鞆から自分のを取りだし拭いた。

彼は

『じゃあクリーニング代出すよ。』

と申し出てくれたが断った。

『そんなに濡れてないですから気にしないでください。』と笑顔で
いうと足早にその場を立ち去り会社へと急いだ。

知らない人とは関わりたくない。とりあえず会社に行って頭を洗おう。

種2

今日はついてないのかな。

まあ朝の占いも10位だったしな。

なんで朝からジュースが降ってくるなんて。ベタベタして気持ち悪い。

なんなんだ。あの男は。幼児じゃないだからジュースとばすかつ！

段々ムカムカしてきた。

会社につくと女子更衣室で頭を軽く洗い顔を拭いた。メイクを直し制服へと着替えた。その時、1年後輩のあかりちゃんが『おはようございます。あれ？どうしたの？髪ぬれてない？』

『そうなんだよ。聞いて、朝から最悪だったよ。』

と朝のあらましを話し怒りも収まったころ、ロッカーの鏡で服装をチェックしスカーフを整えた。

『そういえば』

とあかりちゃんが話し始めた。

『今日から課長かわるんだよね。歓迎会あるのかな？』

『あー。今日からだったよね。歓迎会かー。今日は男の人だけでいくんじゃない？』

『なんか若い人みたいだよ。かっこいいかな。』

あかりちゃん夢見る夢ちゃんになってるよ。

『私としてはおばちゃん上司じゃなきゃ大丈夫かなあ。』

おばちゃん上司は嫌だ。怖い。

更年期なんだか息子が心配なんだかしらないが若い子に当たらないでほしい。

もちろんそんなおばちゃんばかりではないだろうけど、もうトラウマだ。

社会人2年目であのおばちゃん上司はきつかった。

あの頃、同じ課の女の子が3人もやめたのは彼女のせいが八割だと確信している。3人は寿退社だったのに1人は1年後に結婚し、あとの2人は未だにしていない。わたしだって辞めたかった。

毎日、お腹が痛かったのはクーラーの効きすぎのせいではなかったと思う。

とにかく未だに、もう二度と見たくないのは事実だ。

『あれはなしでしょ。。あれよりは佐々木課長のがいいよね。』

佐々木課長とは細かいことで有名な、まあ面倒なちやうだ。

それほど嫌だってことだ。『おばちゃん上司、今は出張所でしょ。』

出張所には所長の他おばちゃんたちが何人かいる。

『出張所の人にはわるいけどあの人には同じ世代の人たちしか一緒に働けないよ。』

とまあ、一通りおばちゃん上司の話題で盛り上がったあと更衣室を後にした。

もう朝の事件は忘れかけていた。

種3

『おはようございます。』

『おはよ。』

と課の同僚たちに挨拶しデスクにつくと昨日のデータをプリントアウトする。3枚目が出てきたところで

『朝礼、始めます。』

2年目島野さんが声をかけた。ぱっとみ中肉中背の爽やかだか、何かしらトラブったら、いち早く逃げる奴であろうと私はにらんでいる。

うちの会社は毎朝、朝礼があるのだ。

その場で全員立ち上がり課長のデスクへと向く。私のまえには熊みたいに大きな田宮代理が立っていた。田宮代理は体型と一緒に穏やかな人だ。まあ基本怒らないし、トラブったら上司として責任とって対応してくれる希少な存在だ。

現実目の前の大きな存在でもある。

もちろん、前見えません。

まあ、いいか。

島野さんの声だけ聞いておこうと目線を落とした。落とした先には机のしたのボールペンが見えた。お気にいりの雑貨やさんで見つけた大好きなくまさんのキャラクターのだ。しかも書きやすい。可愛さを求めると書きにくいものが多かった中で久々出会ったお気に入りだった。

無くしたと思ってたのに、ラッキーだ。嬉しい。

あとで拾おう。

あ、島野さんの話し聞いてなかった。

『では、課長お願いします。』

新しい課長か。見てみようと思ったが無理だった。まあいつでも見れるか。

『1日付けで移動になりました呉陵万作です。私から一言。私の尊敬する…』

マンサクって名前なんだか渋い。

でも、声は若そうだ。優しそうな声だ。

そんなこと漠然とかんがえていたら、

『…では、本日より宜しく願います。』

課長の挨拶も終わり、島野さんが『今日も頑張りましょう。』朝礼を締め括った。

私はサツと屈み机の下に潜り込むと可愛らしいボールペンを手にし、にやついていた。

さあ、仕事しよ。と椅子に座った私の視界の隅に新任の課長と代理2人は会議室に入っていたのが見えた。

データをすべて打ち出し纏めたものを課長のデスクへと提出した。

月初なので仕事も立て込んでおらず少し余裕があったため私はパソコンで資料づくりをしていた。

なんだか私の横に人の気配がしてみると、あかりちゃん。時計をみるとあと5分でお昼だ。

『今日ランチ正直家じゃない？』

会社から3分のお蕎麦屋さんだ。もちろん行く。

デスクに鍵をかけ『田宮代理お先にお昼いってきます。』と声をかけた。

うちの会社はお昼2交代だ。必ずし代理以上の役職者が1人いないとはならない。そのため田宮代理は後半組だ。

お財布とケータイを小さ鞆にいれ歩き出す。

『新しい課長かつこよくない？若そうだったよね。』

あかりちゃん、テンション上がってるね。

『ごめん。見えなかった。』

『あ、代理さんの後ろだったね。マジでアイドルなみの顔だったし背も高かったよ。』

まるで女子校生の時のノリだ。

『でもさ、あかりちゃん、甲野さんが聞いたらおこるんじゃないの？』

甲野さんとは私の同期であかりちゃんの彼氏だ。もう2年はつきあってる。良い奴だ。このカップルほえましくて好きだ。

『吉乃ちゃん何いってるの？浮気はできないよ。マジじゃないから、佑くんに言わないで。ってか吉乃ちゃんにどうよ？』

『え？ないよ。』

『でも、顔、見てないんでしょ？』

『顔とかの前に上司はちよつと無理でしょ？相手にも選ぶ権利あるしね。』

イケメンさんなら私など眼中に入るまい。

『吉乃ちゃん理想高すぎだよ。』

と訳のわからないフォローを入れてくれた。

正直家はあまり混んでおらず、すぐに案内されあかりちゃんは鴨そば。私は山菜そばを頼んだ。

芽

お腹いっぱいランチから戻ると焦った。

私のデスクがない。

いや、いや。デスクはある。私物がない。

ん？

待って。

落ちついて考えよう。

あたしの記憶が間違ってるのかも！？ 記憶喪失！？

なわけナイナイ。

階を間違えちゃったんだ。4階に行くはずが3階だったのね。お酒も飲んでないのに恥ずかしいなあ。

踵を返した：ところで、マテマテ田宮代理いる。同僚もお昼前と変わっていない。なにより：あかりちゃんと一緒にここまできたはず。

パニックだ。

『田宮代理、私のデスクってどうなっただんですか？』

『ああ、瑞木さん。まあちょっと会議室にいつてきてよ。』

なぜ？と訝しく思いながらも言われた通り会議室についた。

会議室に呼ばれるって私何かしたっけ？してないよね？怒られるのかな？

褒められることなどあるはずないしなあ。

ドキドキする胸を抑え、会議室をノックした。

『どうぞ』

中から男性の声がした。

『失礼します。』

と室中にはいると

見覚えのない30代かな？と思われる眼鏡をかけた男性が1人座ってこちらを向いていた。

『あの、経理課の瑞木ですが。』

私の私物がなく、会議室に呼ばれた。しかも待っていたのは見覚えの高そうなスーツの男性。：もしかして人事部？

えっ：クビ？

真っ青になっていると、

『今朝はごめん。大丈夫？』

ため口！なんなの？あんた誰なの？
それより、今朝？なにかあったけ？

目の前の男性は見たことのある笑顔だった。

紺のスーツにネクタイ：

『あっ、朝のジュースの。』

『忘れてた？』と彼は笑った。

『まあ、座って。』

勧められるまま座ったが、状況はわからないままだった。私に進めた椅子の隣の椅子に座った彼はにと爽やかというよりは色気のあ
る笑みを浮かべていた。

なんだか嫌な汗が背中を伝います。

『一緒の会社だったんだな。』

えっ？お見かけしたことはありませんが。

『しかも同じ課の奴だったなんて偶然だな。』

同じ課？

流石の私も同じ課の同僚は覚えてる。

けれど、誰、あんた？である。

訳の解ってない顔をしていたであろう私の眼をみて

『今日から宜しくな。で、今朝のよしみで俺の補佐して。』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0506z/>

色づく葉。

2011年12月2日16時49分発行